師の鏡に若者映る

村上善男著「赤い兎・岡本太郎頌」

中村 聖司

書評

岡本太郎（一九一一―九六）と言えば、戦後前衛美術のスター。あるいは大阪万博「太陽の塔」の作者。そしてテレビでの奇抜な振る舞い。それが多くの人の記憶に残ってきた姿だった。だが彼が亡くなって四年余、その多角的な活動にあらためて照明が当てられ、本格的な再評価が進みつつある。

そうした動きの中で本書の大きな特色は、東北文化と岡本太郎の思想との関係に、著者の実体験に基づきながらスポットを当てたところにある。

岩手の鹿、鹿（しし）踊り、歌山、川倉。昭和三十年代、岡本太郎はそれらに取材し、まさに太郎流とも言うべき思想を発見した。それは残酷なまでに力強く、明朗で、深い、生をめぐる思想であった。その現場に、秘書で後に養女となった岡本敏子氏とともに立ち合っていたのが、村上善男その人だったのである。

村上は二十代初めに岡本太郎の著作に、そして本人に出会い、交流し、振り返って「生涯の師」と呼ぶほどに大きな感化を受けた。とりわけ東北取材に同行した体験が、後の自身の仕事に大きな影響を与えている、という。

そのうえで、村上の「しかし」がある。

それは何か。岡本は東北に発見した思想を、日本民族の根源にある思想と位置づけた。一方村上は、これまでの松本竣介や高橋五郎、棟方志功らの調査研究のように、日本へと拡散されてしまった存在を東北へ奪還する営みを積み上げてきた。

岡本太郎は東北から日本へというベクトル上を疾走する。村上善男は日本から東北へのベクトルをねばり強く探り、そのうえでもう一度、ベクトルを反転させようとする。岩木山を富士山に例えることに、保留をつけざるをえないわけにいかない理由がここにある。

こう見てきて気付くのは、村上にとっての岡本太郎が鏡となり、期せずして村上自身の姿を浮かび上がらせていることだ。それが村上の著作の中での本書の特徴でもある。

今、村上は川崎市岡本太郎美術館で始まった展覧会「万歳七唱 岡本太郎の鬼子たち」に出品している。鬼子のゆえんはきっと「しかし」にある。だが逆説的だが、鬼子となることで、岡本太郎への最高の敬愛と惜別の証（あかし）に違いない。

本書の中で個人的に最も心を震わされた一節は、一九五六年、村上が初個展会場に岡本を迎えた時のくだりであった。階段を駆け上がって来た岡本は、会場を三周して去った。残された村上は書く。「私は熱く、呆然と立ちつくす。総てが、そこに始まったような気がする」。岡本太郎とともに始まったことは、まだ終わっていない。

（北海道立近代美術館学芸員）

岡本氏が描いた著者の似顔絵をあしらった「赤い兎・岡本太郎頌」

文化欄

「万博以前」の作品も

「岡本太郎とEXPO70展」

一九七〇年に大阪で開かれた日本万国博覧会での活動を中心に、岡本太郎の作品を集めた「岡本太郎とEXPO70展―太陽の塔からのメッセージ」が、大阪府吹田市の国立国際美術館で始まった。会期は五月二十八日まで。その後は札幌市、川崎市、新潟県新津市でも開催される。

岡本は、同万博のシンボルとなった「太陽の塔」を制作したほか、テーマ館の展示もプロデュース。万博手掛けた作品のほか、戦前から、顔をモチーフにした彫刻や版画、独特のデザインの家具、自ら撮影した写真などが集められた。

「芸術は爆発だ！」などユニークな言動で知られた岡本。代表的作品の「太陽の塔」も、過激的だとして専門家からは軽視される傾向にあった。しかし、岡本自身が多くの作品を寄贈した川崎市岡本太郎美術館がオープンするなど、最近は再評価の動きが高まってきた。国立国際美術館の中井康之主任研究員は、「万博の作品で残っているのは太陽の塔だけだが、当時を再現しており、それだけではない岡本を体感できる。同時に、万博に至るまでの作品も見てほしい」と話している。

岡本太郎「太陽の塔」（1970年、日本万国博覧会記念協会提供）